



この度、日本ファミリーホーム協議会のホームページに研修委員会のページを作っていただくことになりました。学びを実践につなげていくためのヒントとなるコンテンツを集めていけるといいなと思っています。

最初は、研修委員によるリレーコラムです。研修委員による研修への想いや研修を企画する中での新たな発見や課題、研修にまつわる追加情報などもお届けします。

第1回 リレーコラム

子どもから学んだアドボケイトの必要性

若狭佐和子

研修委員会では、昨年度、今年度と子どもの声を聞くこと、アドボカシーについての研修をお届けしています。実は、私、研修を受けながらもずっと、一番の子どものアドボケイト(子どもの声を聞く人)は里親であるべきでしょう。子どもたちにとってそんな子どものことをよく知らない第三者のアドボケイトさんなんて必要なの?とっていました。

我が家の中学生の思春期の里子ちゃんは、最近気持ちのコントロールがうまく効かず、大人が気づけないようなきっかけで突然キレだし、大暴れになってしまいます。警察や救急車の人にお世話になったこともあり、児童相談所や学校とも密に連絡をとりながら、大事に至らないよう、スタッフも増やして対応しています。受託してから8年。児相の職員さんも学校の先生も変わっていきますから、この子のことを一番よく知るのは私たち里親です。一番よく知っている私たちだからこそ、この子の性質や能力、思考パターンに応じた対応もできるし、この子の気持ちは誰よりもわかっているという自負もあります。だからこそ、この子が無事社会に出ていくことが出来ることを願って、日々の様々な声かけや会話で子どもの成長を促す工夫をし、この子の良いところや興味関心のあることを伸ばしていくことを試行錯誤する中で、子どもの気持ちは一番大切にしたいところでもあります。

暴れた後、子どもと話をします。

何があった? どうしたかった? どうして欲しかった? 今後どうすればいいと思う?
ちゃんと子どもの声を聞こうとしますよね? 私。

だけれども、先日、この子は私に言いました。
「誰かに話を聞いてほしい。」

確かに、最初に暴れて警察の人が来た時、急に穏やかになり、警察の人には素直に自分の気持ちが言えていました。最近では、その役目はお父さん(里父)になっています。暴れたことと一見関係のない話をし出すこともあります。

子どもは第三者の人に話を聞いてもらうことで自分の心が救かるということを知ったようです。

当事者でない第三者が子どもの声を聞くことの必要性を子どもから教えてもらった私。

私が何も言わずこの子の話を聞いていても、きっとこの子には、私のその次に来る「わかるよ。でもね。」の声が聞こえるのだらうと思います。

暴れたときの状況を知らない人が話を聞くと、「そっかー」「そうだったんだね」の言葉がまず入ってきて、自分の心が救われる。ということなのかなと思います。

里親は、子どものアドボケイトであるべきなのは違いないと今も私は思っています。

でも、第三者のアドボケイトさんがいることで、子どもが行き詰まらないで(息詰まらないで)いられる。研修を受けることで、これまで気づけなかったところに気づくことができる。ということも知りました。

学びを実践に繋げることができるような研修を、これからもお届けできるといいなと思います。